ジンポー語における対句表現

倉部　慶太

1　はじめに

ジンポー (カチン) 語はビルマ (ミャンマー) 北部カチン州やシャン州、中国雲南省、東北インドなどで話される言語である。本稿で扱うのはビルマ北部カチン州ミッチーナー市で話される方言である。ビルマ北部はジンポー語の話者数が最も多く、ジンポー語が日常的に話される地域であり、ジンポー語はリンガフランカとしても用いられている。系統的には、チベット・ビルマ諸語に属する。ジンポー語は他のチベット・ビルマ諸語の下位語群の特徴を合わせ持ち、これらの下位言語群を結びつけるような性格を持つ言語としてこれまで注目されてきた (西田 1960, Benedict 1972)。類型的には、主節および従属節における基本構成素順は SV、AOV であり、述語は常に節末に置かれる。基本的に従属部標示型の言語であり、名詞句に格が標示される。ただし、主語の人称・数は、任意であるが、節の主要部である動詞複合体に標示されうる。所有構造では、従属部名詞に属格の格助詞が付加される。他動詞節における必須項 (core argument) の格標示は主格－対格型である。

本稿では、ジンポー語における、nû wâ (母－父)「父母」や lùʔ shá (飲む－食べる)「飲み食いする」のような、類似要素の並列からなる表現 (本稿で「対句表現」と呼ぶ) について記述を行なう。そして、この種の表現の重要な特徴として、並列される要素の配列順序に法則性があるということについて述べる。本稿の構成は次のとおりである。まず、**2** 節で音韻の概略を示す。次に、**3** 節で、対句表現を規定し、具体例を記述する。**4** 節では並列される要素の配列法則について述べる。**5** 節で 4 つのパートからなる対句表現を記述し、**6** 節で対句表現の意味について述べる。

2　音韻

単純語の大部分は、1 音節か 2 音節からなる。音節構造は C_1 (C_2) V (C_3) / T で構成される (T は声調を表す) 。C_2 には / r j / 、C_3 には / p t k ʔ m n ŋ w j / が現れうる。

子音音素には / p t tɕ k ʔ p^h t^h $tɕ^h$ k^h s s^h m n ŋ l r w j / を認める。子音音素 18 個のすべてが C_1 として現れることができる。子音音素 / $tɕ^h$ / は音声的には [ɕ] で実現されるが、緊喉母音を後に従えないなど、他の有気音と同様の振る舞いを見せるため、音韻論的には / tɕ / の有気音であると考えられる (藤原敬介氏のご指摘) 。母音音素には、/ i e a o u <u>i</u> <u>e</u> <u>a</u> <u>o</u> <u>u</u> / がある (母音音素のアンダーラインは緊喉母音を示す) 。先述のとおり、緊喉母音は有気音の後には現れない。また、二重母音 [ui] [oi ~ oɪ] [ai ~ aɪ] [au ~ aʊ] (およびそれに対応する緊喉二重母音) は閉音節には現れない。そのため、これらは、音韻論的に、

それぞれ /uj/ /oj/ /aj/ /aw/ と解釈しうる (大西秀幸氏のご指摘) 。本稿でも二重母音は認めず、これを母音と子音の連続であると解釈することにする。

音節声調言語であり、/ má / [55] / ma / [33] / mà / [31] / mâ / [51] の 4 つの声調を持つ。ただし、/ p t k ʔ / で終わる閉音節においては、/ máp / [55] / màp / [31] の 2 つの声調しか現れない。この閉音節を作る破裂音は破裂を伴わない閉鎖音である。声調の中で / mâ / の出現頻度は低い。また、本稿では /mǎkuj /「象」などの単語に見られる声調を持たない音節 / mǎ / を軽声音節 (atonic syllable) と呼ぶ。軽声音節は単語末や閉音節には現れない。

C_2 の位置に現れうる子音 (介子音) には、/ r j / がある。すべての子音音素のうち、C_1 として介子音を従えることができる子音音素は 6 個ある。C_1 と C_2 の可能な組み合わせを次の表に示す。

表 1　子音結合

		C_1					
		p	k	p^h	k^h	m	n
C_2	r	+	+	+	+		
	j	+	+	+	+	+	+

ジンポー語では、正書法が広く用いられているため、本稿の表記もこの正書法を用いることにする。正書法はおおむね音素表記である。ただし、声調、声門閉鎖音は正書法で表記されないが、本稿ではそれらも付け加えて表記することにする。また、阻害音の後に来る緊喉母音は、正書法では、その前に来る子音によって表されるが、鼻音や流音、半母音の後の緊喉母音は、正書法では書き分けられない。このばあいに、本稿では母音にアンダーラインを引くことにする。正書法に関するその他の留意点を以下に列挙する。

- / p^h /, / t^h /, / k^h/, / s^h / はそれぞれ hp , ht , hk , s と表記する
- 原則として / p /, / t /, / k /, / tɕ /, / s / は、非緊喉母音の前ではそれぞれ b , d , g , j , z と表記する
- / tɕ / は chy 、 / s / は ts 、/ $tɕ^h$ / は sh 、/ ŋ / は ng 、/ j / は y と表記する
- / o / は aw と表記する (一部の単語では習慣的に o と表記されることもある)
- / uj /, / oj /, / aj /, / aw / は、それぞれ wi , oi , ai , au と表記する

なお、本稿では、音節境界に曖昧性があるばあいには . を打つことにする。たとえば、grùpyin「周囲」は / grùp.yin / と / grù.pyin / の 2 つの可能性があるため、grùp.yin と表記することにする。

3　対句表現

3.1　対句表現とは

対句表現 (parallel expression) とは、類似する特徴を持つ要素の組み合わせからなる、並列構造を持つ表現である。構成要素間の関係を示す標識は伴わない。ここでいう類似する特

徴とは、音韻的特徴、意味的特徴、またはその両方を指す。対句表現を作り出す方法は、対句法 (parallelism) と呼ばれる (Solnit1997, 加藤 2005)。また、本稿では、対句表現で並列される要素を対句要素と呼ぶことにする。ジンポー語の対句表現は典型的には 2 つのパートからなる。ただし、対句表現は様々な方法で 4 つのパートからなる表現に拡張されうる (**5** 節を参照)。以下に対句表現の例を示す。(1) は音韻的特徴の組み合わせ、(2) は意味的特徴の組み合わせ (類義語、反義語など)、(3) は音韻的特徴と意味的特徴の両方を含む組み合わせである。なお、グロスの？はその要素が単独では意味をなさないということを示している[1]。

(1)	kumhpaw kúmhpáʔ	（？－贈り物）	「贈り物」	(kr3:33)
(2)	num la	（女－男）	「男女」	(kr4:54)
(3)	gǎnù gǎwà	（母－父）	「両親」	(kr3:19)

対句表現のような例は東南アジア地域の諸言語に広く見られ、ジンポー語では対句表現が頻繁に用いられる。そのため、ジンポー語文法において、対句表現は決して周辺的なものではなく、無視できない位置を占めているものと考えられる。なお、対句表現と類似する現象は様々な名称で知られている。たとえば、co-compounds, co-ordinate compounds, copulative compounds, couplets, dvandva compounds, elaborate expression, paired words, parataxis, echo word, attendant word, binomials などの術語がある。

3.2　様々な例

本節では、対句表現の具体例を記述する。

3.2.1　名詞の対句表現

3.2.1.1　意味の組み合わせ

以下に示す (4) から (12) までの例は、対句要素間に類義関係が見られる例であり、(13) から (21) までの例は、対句要素間に反義関係が認められる例である。

(4)	mà gǎshà	（子供－子供）	「子供」	(mlhk2)
(5)	tsáʔ chyǎrû	（酒－酒）	「酒」	(kr4:43)
(6)	ǎmú bùnglì	（仕事－仕事）	「仕事」	(kr3:11)
(7)	jǎhpàwt mǎnàp	（朝－朝）	「朝」	(kr3:18)
(8)	hpún kǎwá	（木－竹）	「木や竹」	(kr4:76)
(9)	jà gùmhpràw	（金－銀）	「金銀」	(kr3:43)

[1] 無意味語を含む対句表現はオーストロアジア言語学などで知られる echo word および expressive に相当し、有意味語からなる対句表現とは別のものとして扱うべきかもしれない。ただし、要素の配列法則は両者に共通であるため、本稿では両者をまとめて扱うことにする (要素の配列法則については **4** 節を、echo word および expressive については長田 2009 を参照)。

(10)	taukáwk taubrèn	（亀ースッポン）	「亀とスッポン」	(kno)
(11)	lăbù pălawng	（ズボンー服）	「衣類」	(kr2:7)
(12)	màumẁi màusa	（物語ー物語）	「物語」	(mlhk0)
(13)	nû wâ	（母ー父）	「父母」	(radio)
(14)	ji woi	（祖父ー祖母）	「祖父母」	(kr4:106)
(15)	găhpù găn au	（兄ー弟）	「兄弟」	(kr3:44)
(16)	găn au găna	（妹ー姉）	「姉妹」	
(17)	lăgaw lătáʔ	（足ー手）	「手足」	(ml9)
(18)	pai hkra	（左ー右）	「左右」	(kr3:94)
(19)	jàn shăta	（太陽ー月）	「太陽と月」	(blog)
(20)	dìngdung dìngdàʔ	（北ー南）	「南北」	(kr3:92)
(21)	măyùʔ dàmàʔ	（マユーダマ）	「マユとダマ[2]」	(kr4:43)

3.2.1.2　無意味な対句要素

対句要素の一方、または両方が単独では意味をなさないというような対句表現も観察される。この種の例で、無意味要素が有意味要素から規則的に導き出されるということは基本的にないようである。また、以下の例のとおり、無意味要素は対句表現において、前部要素にも後部要素にもなりうる。なお、無意味要素を含む対句表現は、2 音節語＋2 音節語のような、対句要素間で音節数が同一である対句表現がほとんどである。

(22)	ărung ărái	（？ーもの）	「もの」	(gtl48)
(23)	nàmlaw nàmlàp	（？ー木の葉）	「木の葉」	(kr4:74)
(24)	mănàw mănang	（？ー友だち）	「友だち」	(blog)
(25)	dùsàt dù.myéng	（動物ー？）	「動物」	(kr4:103)
(26)	nàmsì nàmsàw	（果実ー？）	「果実」	(kr4:58)
(27)	nìngbaw nìnglà	（指導者ー？）	「指導者」	(krj3:20)
(28)	ginrù ginsà	（？ー？）	「カチン民族の民族移動」	(kr4:23)
(29)	gărài găsàng	（？ー？）	「神」	(kr3:62)

3.2.2　動詞の対句表現

3.2.2.1　意味の組み合わせ

以下に示す (30) から (37) までの例は、対句要素間に類義関係が見られる例であり、(38) (39) の例は、対句要素間に反義関係が認められる例である。

---

[2] マユは wife giver lineage を指し、ダマは wife taker lineage を指す (Ｅ・Ｒ・リーチ 1987)。

(30)	mau gǎjàwng	（驚く－驚く）	「驚く」	(gtl15)
(31)	ràʔ shǎráwng	（好む－好む）	「好む」	(mlhk31)
(32)	byìn tai	（なる－なる）	「なる」	(kng)
(33)	chye chyàng	（知る－知る）	「知る」	(kr3:32)
(34)	jǎhtèn shǎbyáʔ	（壊す－壊す）	「壊す」	(kng)
(35)	kà mǎnàwt	（踊る－舞う）	「踊り舞う」	(kng)
(36)	tsáwʔràʔ	（愛する－好む）	「愛する」	(kr3:70)
(37)	hkrìt tsàng	（恐れる－心配する）	「恐れ心配する」	(kr3:38)
(38)	dùt mǎri	（売る－買う）	「売り買いする」	(blog)
(39)	pru shàng	（出る－入る）	「出入りする」	(kng)

3.2.2.2　無意味な対句要素

名詞の対句表現のばあいと同様、対句要素の一方、または両方が単独では意味をなさないというような動詞の対句表現も存在する。ただし、動詞の対句表現ではこの種の例は多くない。なお、無意味な要素がどのような形式であるかは基本的には予測できない。

(40)	zìng.rì zìng.rát	（虐待する－？）	「虐待する」	(kr3:34)
(41)	gǎsùk gǎsàk	（？－？）	「混乱している」	

3.2.3　その他の対句表現

3.2.3.1　副詞の対句表現

以下の例のような、副詞の対句表現も存在する。副詞の対句表現は、多く存在することが予測されるのであるが、どのような意味を表しているか簡単には分からないものが多く、現時点で筆者が把握している例はほんのわずかにすぎない。以下の (42) は、類義語からなる例であり、(43) は、一方または両方の要素が単独では用いられない例に該当する。

(42)	shawng nnan	（先に－新しく）	「最初に」	(kr4:6)
(43)	wànglu wànglàng	（？－？）	「遠慮なく」	(gtl78)

3.2.3.2　動詞助詞の対句表現

動詞助詞とは動詞の直後に置かれて動詞を修飾する助詞であり、様々なアスペクト的意味やモダリティ、エヴィデンシャリティー、ヴォイスなどを表す。ジンポー語には同じような意味機能を持つ動詞助詞がいくつか存在し、これらが対句表現として組み合わされ、頻繁に用いられる (もちろん、これらは動詞助詞として単独でも用いられる)[3]。

---

[3] 動詞助詞の中には文法化により動詞から発展した形式も多い (倉部 2010 を参照)。したがって、本小節の例の一部は動詞の対句表現がそのままの形で動詞助詞に発展したものとも考えられるかもしれない。ただし、動詞のばあいには対句表現にならないものが動詞助詞のばあいには対句表現になるという例

(44) gănau má làika gălaw taw ngà ai î
弟 も 本 する CONT CONT VSP SFP.Q
「あなたも勉強していますか」(mail)

(45) shi gàw bùnglì shăkùt dìk htùm ai wa lăngâi rê
3SG TOP 仕事 頑張る 最上 最上 REL 人 1 COP
「彼は仕事を最も頑張っているひとです」(kt)

(46) hpún lăngâi mi jáwm hkái tàwn dá sai
木 1 一緒に 植える 結果保持 結果保持 VSP
「木を 1 本一緒に植えておいた」(blog)

(47) ánhte hpa n-chye káu dàt ai
1PL 何 NEG-知る 徹底 徹底 VSP
「私たちは何も知らなかった」(blog)

(48) măre măshà-ni hpéʔ dùt jàwʔ ya ai
町 人-PL ACC 売る BEN BEN VSP
「町の人たちに売ってあげた」(kng)

(49) dai zàwn nga ai mying gàw ń-nâ yu gà ai
その ように 言う REL 名前 TOP NEG-聞く EXP EXP VSP
「そのような名前は聞いたことがなかった」(jp)

(50) shi gẁi găwá hkrúm gătùt ai
3SG 犬 咬む PASS PASS VSP
「彼は犬に咬まれた」

4 対句要素の配列法則

4.1 先行研究

対句要素の配列順序には法則性がある。ジンポー語の対句表現における対句要素の配列順序を中心的に扱った先行研究には、戴 (1986) がある (この論文では本稿でいう対句表現は「並列複合語」と呼ばれている) 。戴 (1986) では対句要素の配列法則として、次に示す 7 つの法則が取り出されている。なお、このうち、音韻に関する法則は「元音和諧 (母音調和) 」と呼ばれているが、この現象はいわゆる vowel harmony ではないため、術語としては不適切であると思われる。

(51) 戴 (1986) の示す配列法則
- 前に来る語の母音は後に来る語の母音よりも高いか、または両者の母音の高さは同一
- 末子音なしの要素は末子音ありの要素よりも先 (p.24)
- 鼻音末子音と閉鎖音末子音では鼻音末子音が先 (p.24)

もあり、また、動詞に由来しない形式が動詞助詞として対句表現になる例もある。このような例については、動詞の対句表現に由来すると考えることはできない。

- 無意味語は後に置かれることが多い (p.24)
- 固有語は借用語よりも先 (p.27)
- 意味が重要なものが先 (p.27)
- 文語は口語よりも先 (p.27)

戴 (1986) はどれだけの量の対句表現を調査したのかを述べておらず、この論文で掲げられている例は多くない。また、記述に不明瞭な部分もある。本稿では、筆者が独自に収集した 515 タイプの対句表現[4] を対象に分析し、戴 (1986) の配列法則の一部に改定を加える必要があること、および、戴 (1986) の配列法則以外の法則も存在することを述べる。さらに、戴 (1986) の挙げる配列法則のうち 5 つの法則は、現時点では積極的に働いていると主張することができないものと見て、これらの法則を保留すべきであるという考えを述べる。

4.2 配列法則

以下、筆者が収集した例を分析し 3 つの配列法則を取り出す。また、配列法則の一部は文法のほかの部分でも働いていること、および、配列法則を通言語的観点から見たばあいについても述べる。なお、多くの対句表現はその構成要素の順序を逆転することができないが、いくつかの対句表現では対句要素の順序が逆転しうる。以下の議論では、このような例は除外して考察することにする。

4.2.1 配列法則 1

戴 (1986) で最も詳しく述べられている法則は、「前に来る語の母音は後に来る語の母音よりも高いか、または両者の母音の高さは同一」という法則である (どの音節の母音が関与するかは後述)。この法則は筆者が収集した多くの例に当てはまる。ただし、戴 (1986) のこの法則は対句要素間で母音の広さが異なるばあいと同一のばあいの両方をカバーしているが、この法則が影響力を持つのは母音の広さが異なるばあいのみである。また、戴 (1986) はこの法則を対句要素間で音節数が異なるばあいにも当てはめているが、このばあいには別の法則が存在する (法則 2 として **4.2.2** 節で述べる) 。これらの事情を踏まえて、本稿では戴 (1986) の法則を次のように改定する。

(52) 配列法則 1： 対句要素間で音節数が同一であるばあい、相対的に狭い母音を含む対句要素は、相対的に広い母音を含む対句要素よりも先に来る

2 節で述べたとおり、ジンポー語の母音音素には /i e a o u <u>i</u> <u>e</u> <u>a</u> <u>o</u> <u>u</u>/ がある。したがって、配列法則 1 は、次に示す階層スケールにおいて、相対的に左側に位置する母音を含む対句要素が、相対的に右側に位置する母音を含む対句要素よりも先に来ることを予測する。

---

[4] 筆者が収集した例のほとんどは名詞の対句表現および動詞の対句表現である。また、有意味語の組み合わせからなる例が大部分であり、無意味語を含む例は多くない。

(53)　配列法則 1 の母音の階層スケール

i , <u>i</u> , u , <u>u</u> ＞ e , <u>e</u> , o , <u>o</u> ＞ a , <u>a</u>

この法則が当てはまる具体例を見る前に、留意すべき事柄を 2 点、述べておく。

まず、対句要素のどの音節の母音の広さが関与的であるかについて述べる。**2** 節で述べたとおり、ジンポー語の単語の大部分は、1 音節か 2 音節からなる。1 音節語＋1 音節語からなる対句表現では母音は 2 つしかなく、どの母音の広さを比べるかは自明であるが、2 音節語＋2 音節語や 1 音節語＋2 音節語などからなる対句表現のばあい、どの音節の母音の広さを比べるかは自明ではない。これについて、戴 (1986) は、2 音節語＋2 音節語では各対句要素の第 1 音節目と第 2 音節目の両方の母音の広さを比べるとし、1 音節語＋2 音節語では 1 音節語の母音と 2 音節語の第 2 音節目の母音の広さを比べるとする。しかし、2 音節語＋2 音節語の例については、筆者が分析した例を見る限り、各 2 音節語の各第 1 音節目の母音は関与的ではないようである。このことは、ジンポー語の 2 音節語の第 1 音節の大部分が軽声音節であることと関係しているようである。結局、このような、2 音節語＋2 音節語の対句表現の大部分の各第 1 音節目の母音は同一になるため、ほとんどの例でこれらの音節の母音は無視しておいて構わない。また、1 音節語＋2 音節語および 2 音節語＋1 音節語のような例については、先述のとおり、次の **4.2.2** 節で見る配列法則 2 が働いており、筆者が改定した配列法則 1 の適用外であるため、各対句要素のどの音節の母音の広さを比べるかということについて考える必要はない。

次に、対句要素が二重母音を含むばあいについて述べる。戴 (1986) はジンポー語に二重母音を認めているにもかかわらず、対句要素が二重母音を含むとき、二重母音のどの母音が関与的であるかということについて何も述べていない。一方、本稿では、**2** 節で述べたとおり、二重母音を認めていないため、このような問題は生じない。

以上、留意点について述べたので、次に、配列法則 1 が実際に働く例を見ていく。筆者が収集した例の中で、各対句要素の音節数が同一で、かつ、対句要素間で母音の広さが異なる例は 255 タイプあり、この法則はこの中の 234 タイプに当てはまる。たとえば、lǎgaw lǎtáʔ (足－手)「手足」が足－手の順に配列されるのは、この法則のためである。nû wâ (母－父)「父母」が母－父の順であるのに対して、ji woi (祖父－祖母)「祖父母」が祖父－祖母の順であることもこの法則で説明がつく。さらに、次の対句表現のペアが非対称性をなすことも、この法則で説明できる (ただし、次の 3 つのペアの各 2 番目の例の順序は法則 1 からは予測できない) 。すなわち、gǎlù gǎbà (長い－大きい) と gǎjì gǎdùn (小さい－短い) のペア、gǎhpù gǎnau (兄－弟) と gǎnau gǎna (妹－姉) のペア、gǎnù gǎshà (母－子供) と gǎshà gǎwà (子供－父) のペアである。戴 (1986) で指摘されているように、ジンポー語で、「東西南北」を東－西－北－南 (sìnpráwʔ sìnnáʔ dìngdung dìngdàʔ) の順に配列するのも、この法則のためであると思われる[5]。配列法則 1 が関与する例としては、ほかにも次のような例が観察される。

[5] ただし、この配列はシャン語からの影響である可能性も否定できない。

(54)	ămú măgám	（仕事－任務）	「仕事」	(kr3:11)
(55)	ăshu ăshàn	（？－獲物）	「獲物」	(kr2:79)
(56)	găhpù găna	（兄－姉）	「兄と姉」	(ss)
(57)	găshù găshà	（孫－子供）	「子孫」	(krj3:20)
(58)	găni gătsà	（義母－義父）	「義父母」	(kr3:58)
(59)	gàidaw gàidá	（？－未亡人）	「未亡人」	(gtl13)
(60)	hkăkrít hkădawn	（蟋蟀－虫の一種）	「蟋蟀などの夜に鳴く虫」	(kr2:6)
(61)	hkàʔshì hkàʔgài	（支流－支流）	「支流」	(kr3:94)
(62)	hkúmpúp hkumpa	（泥－泥）	「泥」	(ss)
(63)	măchyíʔ măhkáwʔ	（病気－？）	「病気」	(kr4:94)
(64)	mălùʔ măshá	（飲み物－食べ物）	「飲食物」	(mlhk59)
(65)	măhkawn shăbràng	（未婚女性－未婚男性）	「未婚女性と未婚男性」	(kr4:43)
(66)	myìt kraw	（心－内心）	「心」	(uta)
(67)	nàmpù nàmpan	（花－花）	「花」	(kr2:19)
(68)	nrút nra	（？－骨）	「骨」	(kr2:75)
(69)	hpàʔjí nìngjá	（知識－光彩）	「知識と光彩」	(gtl6)
(70)	shăní shănáʔ	（昼－夜）	「昼夜」	(kr3:43)
(71)	shăbri shăbrai	（？－賃金）	「賃金」	(ml37)
(72)	shăyi shădang	（少女－少年）	「少年少女」	(blog)
(73)	awng dàng	（勝つ－勝つ）	「勝つ」	(kno)
(74)	gaw gàp	（建てる－屋根を覆う）	「建てる」	(kng)
(75)	jàw hkrák	（正しい－合う）	「適切な」	(jhhjhk1)
(76)	jàwʔ ya	（与える－与える）	「与える」	(mail)
(77)	jăhtèn shăzà	（壊す－壊す）	「壊す」	(kng)
(78)	jăsù shăràwt	（起こす－起こす）	「起こす」	(mlhk0)
(79)	hkùʔ hkáu	（親しむ－親しむ）	「親しむ」	(ml60)
(80)	măkàwp măgá	（守る－守る）	「守る」	(jhhjhk8)
(81)	măsùʔ hkălém	（騙す－騙す）	「騙す」	(kr3:67)
(82)	ngút kréʔ	（終わる－終わる）	「終わる」	(kno)
(83)	ngẁi ngawn	（穏やかな－穏やかな）	「穏やかな」	(mlhk72)
(84)	púʔ bá	（疲れる－疲れる）	「疲れる」	(ml60)
(85)	ràwt tsáp	（立つ－立つ）	「立つ」	(hth)
(86)	shămu shămàwt	（動く－動く）	「動く」	(kr2:70)
(87)	tàwn dá	（置く－置く）	「置く」	(kno)
(88)	htèn byák	（壊れる－壊れる）	「壊れる」	(ml4)

この法則に対する反例は 21 タイプある。次のような例がそれである。

(89) ǎnà zìnlì （病気－疫病） 「病気」 (kr4:112)
(90) dùsàt dù.myéng（動物－？） 「動物」 (kr4:103)
(91) sàn séng （清潔な－清潔な） 「清潔な」 (gtl71)

4.2.2 配列法則 2

先述のとおり、ジンポー語の単純語の大部分は 1 音節か 2 音節である。だとすれば、2 つのパートからなる対句表現の構成には、論理的には次の組み合わせがあるはずである。すなわち、1 音節語＋1 音節語、2 音節語＋2 音節語、1 音節語＋2 音節語、2 音節語＋1 音節語のどれかである。ところが、論理的には予測されるにもかかわらず、2 音節語＋1 音節語の組み合わせからなる対句表現はほとんど存在しない。この非対称性の理由は、次の法則が存在するからにちがいない。

(92) 配列法則 2：対句要素間で音節数が異なるばあい、1 音節語は多音節語 (2 音節語) よりも先に来る

この法則は、戴 (1986) では述べられていない。筆者が収集した例の中で、対句要素間で音節数が異なる対句表現は 77 タイプあり、この法則が当てはまる例は 75 タイプある。次のような例がそれである。

(93) chyu pǎlá （弾丸－矢） 「弾丸と矢」 (blog)
(94) du sǎlang （首長－助言者） 「首長と助言者」 (kng)
(95) dum ntâ （倉庫－家） 「家」 (kr4:23)
(96) jà gùmhpràw （金－銀） 「金銀」 (kr3:43)
(97) jà lùngseng （金－翡翠） 「金と翡翠」 (uta)
(98) jàn shǎta （太陽－月） 「太陽と月」 (blog)
(99) jùm mǎjáp （塩－唐辛子） 「香辛料」 (kt)
(100) kraw lǎwang （内心－内心） 「内心」 (blog)
(101) mà gǎshà （子供－子供） 「子供」 (mlhk2)
(102) myìt mǎsìn （心－心） 「心」 (ml61)
(103) nàm mǎling （森－森） 「森」 (kr4:62)
(104) hpún kǎwá （木－竹） 「木や竹」 (kr4:76)
(105) shàt lùʔshá （食べ物－食べ物） 「食べ物」 (kr4:61)
(106) tsáʔ chyǎrû （酒－酒） 「酒」 (kr4:43)
(107) yáʔ shǎní （日－日） 「日」 (kng)
(108) bau mǎkà （養う－養う） 「養う」 (mlhk3)
(109) dúm mǎrìt （思い出す－思い出す） 「思い出す」 (kng)
(110) gàwk shǎbàm （吠える－吠える） 「吠える」 (ml14)

(111)	hkrúm gădùp	（会う－会う）	「会う」	(kr3:35)
(112)	hkrúm gătùt	（会う－会う）	「会う」	(kng)
(113)	hkrìt găjàwng	（恐れる－驚く）	「恐れ驚く」	(kr4:66)
(114)	hkyé măwái	（救う－救う）	「救う」	(kr3:69)
(115)	mawn sùmli	（飾る－飾る）	「飾る」	(blog)
(116)	mau găjàwng	（驚く－驚く）	「驚く」	(gtl15)
(117)	rà ăhkyàk	（必要な－重要な）	「必要で重要な」	(kno)
(118)	ràʔ shăráwng	（好む－好む）	「好む」	(mlhk31)
(119)	sàwk săgàwn	（調べる－調べる）	「調べる」	(kng)
(120)	tàu hkălúm	（歓迎する－歓迎する）	「歓迎する」	(kng)
(121)	tù găbrìm	（光る－輝く）	「光り輝く」	(blog)
(122)	tsun shăga	（言う－話す）	「話す」	(kng)
(123)	ùp mădùʔ	（統治する－統治する）	「統治する」	(kng)
(124)	zùp găhkyin	（集まる－集まる）	「集まる」	(kr3:94)

現時点までに見つかっている、この法則に対する反例は次の 2 例のみである。このうち、2 つ目の例は、次に見る法則 3 が関与しているようであるため、**4.2.3** 節で改めて述べる。

(125)	lămù gá	（空－地）	「天地」	(mlhk19)
(126)	làika bùk	（本－本）	「本」	(kt)

4.2.3　配列法則 3

戴 (1986) の掲げる配列法則の中では「固有語は借用語よりも先」という法則も働いているようである。この法則は対句表現が借用語と固有語とからなることを前提としているため、本稿ではこの点をより明示的にし、次のような法則に言い換える。

(127) 配列法則 3：対句要素が固有語と借用語からなるばあい, 固有語は借用語よりも先に来る

筆者が収集した例では対句要素の一方が借用語であるという例は多くないが、この法則に違反する明確な反例は見当たらないため、本稿でもこの法則を認めておく。次のような例がある。

(128)	lăgùt dămyàʔ	（強盗－強盗）	「強盜」(kr3:66)	＜ dămyâ	ビルマ語
(129)	hpàʔjí byèng.yà	（知恵－知恵）	「知恵」(kng)	＜ pyìɴnyà	ビルマ語
(130)	shămán chyéjú	（祝福－恩恵）	「祝福と恩恵」(mail)	＜ cézú	ビルマ語
(131)	yíʔ hkaunà	（畑－田）	「田畑」(kr4:107)	＜ xau31la55?	シャン語
(132)	làika bùk	（本－本）	「本」(kt)	＜ book	英語

(130) の例では広い母音を含む要素が狭い母音を含む要素よりも先に来ている。これは法則 1 の違反である。また、(132) の例では 2 音節語が 1 音節語よりも先に来ており、法則 2 の違反になる。このように、法則 3 は法則 1 や法則 2 よりも強力である可能性がある。ただし、固有語と借用語からなる対句表現の数は多くなく、現時点でははっきりしたことを言うことはできない。

4.2.4　残された問題

以上で取り上げた 3 つの法則ではなおも配列を予測できないパタンが存在する。それは、各対句要素の音節数が同一で、かつ、対句要素間で母音の広さが同一であるという対句表現である。この種の例の配列において、音韻的な要因や意味的な要因が働いているかどうかは、現時点では明らかではない。このような例は、筆者が収集した対句表現中、131 タイプある。次のような例がそれである。

(133)	hpăga yùmga	（商売－商売）	「商売」	(kr4:2)
(134)	rúʔyàk jàmjàu	（困難－災難）	「困難や災難」	(blog)
(135)	măsìn sălum	（心－心）	「心」	(mlhk20)
(136)	jìnghkùʔ jìng.yúʔ	（親戚－？）	「親戚」	(kt)
(137)	ănà ăhkyá	（病気－？）	「病気」	(kr4:94)
(138)	bù hpún	（穿く－着る）	「穿き着する」	(mlhk27)
(139)	gaw de	（建てる－建てる）	「建てる」	(kng)
(140)	kàm shám	（信じる－信じる）	「信じる」	(kr3:16)
(141)	hkyèt hkráwʔ	（乾く－乾く）	「乾く」	(blog)
(142)	lù sú	（得る－富む）	「富む」	(kr4:87)
(143)	pyaw ngàwn	（心地よい－心地よい）	「心地よい」	(uta)
(144)	shărín ăchyìn	（教える－教える）	「教える」	(gtl9)
(145)	shăngài shăpràt	（生む－生む）	「生む」	(kt)
(146)	shăkàwn kúngdáwn	（ほめる－ほめる）	「ほめる」	(kr3:54)
(147)	tsan gàng	（遠い－遠い）	「遠い」	(mlhk45)
(148)	yàk hkàk	（難しい－？）	「難しい」	(jhhjhk8)

4.2.5　戴 (1986) のその他の法則はあるか

戴 (1986) は以上で取り上げたほかにもいくつかの法則を取り出しているということはすでに述べた。ここでこれらを繰り返すと、次の 5 つの法則をも取り出している。

(149)　戴 (1986) の挙げるその他の配列法則

- 末子音なしの要素は末子音ありの要素よりも先
- 鼻音末子音と閉鎖音末子音では鼻音末子音が先
- 無意味語は後に置かれることが多い
- 意味が重要なものが先
- 文語は口語よりも先

これらの法則は、**4.2.4** 節で見た、各対句要素の音節数が同一で、かつ、対句要素間で母音の広さが同一であるというパタンの対句表現における配列順序の問題を解決することが期待されるが、実際にはこれらの法則が働いているかどうか、はっきりしたことをいうのは難しいのではないかと思われる。以下では、戴 (1986) のその他の法則について、順に検討していく。

まず、「末子音なしの要素は末子音ありの要素よりも先」という法則であるが、**4.2.4** 節のパタンの対句表現の中で、末子音なしの要素と末子音ありの要素からなる対句表現は 19 タイプある。その中でこの法則の反例は 8 タイプある。このように、全体の数に対して反例が多い。また、この法則はほかの法則の反例を説明する能力も持たない。現時点で集まっている例は少数であり、即座にこの法則を否定することはできないが、同時に、肯定することもできないものと思われる。このため、本稿ではこの法則に対して肯定も否定もせず、保留しておくことにする。

次に、「鼻音末子音と閉鎖音末子音では鼻音末子音が先」という法則であるが、**4.2.4** 節で見たパタンの対句表現の中で、鼻音末子音の要素と閉鎖音末子音の要素からなる対句表現は 14 タイプある。この中で反例は 5 タイプである。現時点ではこの法則を否定することも、肯定することもできない。そのため、本稿ではこの法則を保留しておく。

「無意味語は後に置かれることが多い」という法則であるが、**4.2.4** 節のパタンの対句表現の中で、一方の要素が無意味語である対句表現は 12 タイプしかないが、無意味要素が後に置かれる例は 11 例ある。現段階では例が少数であるためこの法則を積極的に肯定することはせず、本稿ではこの法則を保留にしておくが、さらに多くの例が集まれば、この法則を肯定することができるようになる可能性が高いのではないかと思われる。なお、法則 1 に従う例では無意味語が前に来る例も多いため (**3.2.1.2** 節および **4.2.1** 節の該当する例を参照) 、「無意味語は後に来る」という法則が認められるとすれば、この法則は法則 1 よりも弱い法則であるということになるだろう (ただし、極少数ではあるが、法則 1 に反して無意味語が後に来る例も存在する。たとえば、90 の例) 。なお、無意味語を含む対句表現は、対句要素間で音節数が同一である例がほとんどであるため (**3.2.1.2** 節) 、音節数に関する法則 2 との強さ関係を考える必要はないであろう。

「意味が重要なものが先」という法則であるが、戴 (1986) は jà gùmhpràw (金－銀) や jǎtèn shǎrùn (壊す－壊す) の例を挙げている。前者の例は、法則 2 に従っているものと見る方が適切であると考えられる。また、後者の例で、なぜ shǎrùn の方が意味的に重要であるといえるのか定かではない。いずれにせよ、戴 (1986) はこの 2 つの例しか出しておらず、また、意味的に重要なものというのは必ずしも明確な基準であるとはいえないため、本稿では、この法則が働いていると積極的に主張することはできないものと考えたい。

「文語は口語よりも先」という法則であるが、この法則では、**4.2.4** 節のような例を説明することはできないようである。また、むしろ文語の方があとに来ているように見える例も目につく。このため、本稿ではこの法則を積極的に認めることはできないと考えておく。

4.3　配列法則 1 の適用範囲の拡張

4.3.1　擬音語

先行研究では述べられていないが、配列法則 1 は擬音語の配列順序にも当てはまる。ジンポー語の擬音語は、基本的に 1 音節＋1 音節か、2 音節＋2 音節からなるため、要素間の音節数に関する法則 2 が関与することはなく、また語種が関係することもないため、法則 3 も関与しない。筆者が現時点までに収集した 2 つ以上の要素からなる擬音語は 80 タイプある。その中では、配列法則 1 に対する反例は見つかっていない。表 2 に、4 つのパートからなる擬音語の例の一部を示す[6]。

表 2　擬音語

形式	表す音	形式	表す音
bung bùng bang bàng	ボールが跳ねる音	jùk jùk jàk jàk	電車が走る音
bùk bùk bàk bàk	人が走る音	nyét nyét nyát nyát	牛車が走る音
chyìt chyìt chyàt chyàt	鼠や小鳥の鳴き声	nyìt nyìt nyèt nyèt	ドアが軋む音
chyùt chyùt chyèt chyèt	鼠の鳴き声	ngùt ngùt ngàt ngàt	豚の鳴き声
chyút chyút chyát chyát	髭剃りの音	ràw ràw hpràw hpràw	川の水が流れる音
chyúp chyúp chyáp chyáp	ストローで吸う音	rùng rùng ràng ràng	大雨の音
chyèk chyèk chyàk chyàk	時計の針が動く音	pàwng pàwng pàng pàng	火が燃える音
dèng dèng dèng dèng	ベルの音	prùk prùk pràk pràk	泥の上を歩く音
dùk dùk dàk dàk	歩く音, 心臓が鳴る音	hpràw hpràw hprà hprà	水が流れる音
gàwk gàwk gàk gàk	馬が歩く音	hpáwk hpáwk hpák hpák	葉っぱが落ちる音
gung gùng gang gàng	雷が鳴る音	sàwt sàwt sàt sàt	足で床を擦る音
kăték kăték kăték kăték	鶏の鳴き声	shàw shàw shè shè	炒める音
káwk káwk kák kák	机を叩く音	tèng tèng tàng tàng	鉄を打つ音
krèt krèt kràt kràt	蛙の鳴き声	hték hték hták hták	何かを軽く叩く音
krìt krìt kràt kràt	蟋蟀などの鳴き声	úʔ úʔ éʔ éʔ	赤ん坊の泣き声

4.3.2　並列句と並列文

戴 (1986) では、対句表現の配列法則 1 は、htèʔ「～と、～して」などで繋がれる、並列句や並列文にまで「拡散」していくと述べられている。たとえば、戴 (1986: 28) では以下の 2 つの例が示され、これらの例で nû「母」と wâ「父」がこの順序で配列されるのは、配列法則 1 のためであると述べられている。

---

[6] 擬音語は対句要素の両方が無意味語である対句表現の一種であるとも考えうる。ただし、擬音語は 4 つのパートからなるものが多く、また、節中に現れるときに引用標識 ngú, nga「～と」を伴う点で無意味語からなる対句表現とは異なる。このため、本稿ではこれらを別ものとして扱う。

(150) nû htèʔ wâ
母 COM 父
「母と父」

(151) nû gàw hkáimú măshà rê, wâ gàw jàkmú măshà rê
母 TOP 農民 COP 父 TOP 工場労働者 COP
「母は農民である、父は工場労働者である」

しかし、たとえこのような配列の傾向があるにしても、これらの例においては、nû「母」と wâ「父」の順序は逆転可能であり、これらの例を配列法則という「法則」によって説明することには問題があると思われる。このような例は配列法則 1 が働いているというよりは、むしろ、nû wâ (母－父)「両親」という既存の対句表現を参照して配列されていると見るべきではないかと思われる。本稿では、配列法則 1 が対句要素の配列を決定し、このようにして作られた対句表現が並列句や並列文の配列に影響しているものと考えたい。配列法則 1 が並列句や並列文に見られる配列を決定する第一の要因ではないと見る。

4.4 通言語的に見たジンポー語対句表現の配列法則

以上見てきた配列法則がほかの言語にも見られるということは様々な先行研究によって指摘されてきた。早田 (1977) は日本語、朝鮮語、満洲語の対語を調査し、「狭－広」「短－長」の順序は世界の言語に広く見られるのではないかと述べている (pp.126–127, 130) 。また、戴 (1986, 2000) は、チベット語やハニ語にも「狭－広」の法則が認められるとしている。ほかにも、Kiparsky (2009) は現代ギリシャ語、英語、サンスクリットの co-compound に見られる配列制約のひとつとして SHORTEST FIRST を挙げている。Malkiel (1959: 149–151) は現代英語に見られる binomials の配列要因のひとつとして、「短－長」の順序を挙げる。また、ビルマの 3 つの地名 yé, beiʔ, dăwè は並べて言うときこの順に配列されるのであるが、実際の地理的順序は北から南に yé → dăwè → beiʔ の順である。この yé, beiʔ, dăwè という順序も短い要素が先に来るように並べられているのではないかと思われる。また、早田 (1977: 131) では現代日本語について、要素の一方が漢語であるばあい、漢語は後に並べられる例が目につくと述べられている (なさけ容赦、ものみ遊山、こっぱ微塵、いわく因縁、なみ大抵 etc.) 。以上見た「狭－広」「短－長」「固有語－借用語」以外の要因も様々な言語で知られているようである。以下で、ほかの言語に見られるその他の要因をいくつか見ておく。

● 音韻。構成要素の初頭子音。早田 (1977) や Labrune (2006) はこの要因を中心に扱った論文である。早田 (1977) は、日本語、朝鮮語、満洲語の例では、前部要素と後部要素の頭子音が関与的であると述べる。たとえば、日本語の対語は、φ＞ y , w ＞ n , r ＞ t , d ＞ s , z ＞ p , h , b ＞ m ＞ k , g (母音・半母音＞歯 (茎) 子音＞唇子音＞軟口蓋子音) という階層スケールにおいて、相手成員の初頭音よりも自己の初頭音が左に位置する成員が前部成員となるとされている。たとえば、次のような例がある (pp.127–129) 。あべこべ、でこぼこ、どぎまぎ、ど

さくさ、へどもど、いやはや、まぜこぜ、めちゃくちゃ、すたこら、てきぱき、ちらほら、ちやほや、うろちょろ、やぶれかぶれ、じたばた、赤白、甘辛、雨風、朝晩、足腰、後先、色つや、波風、なりふり、根掘り葉掘り、飲み食い、伸るか反るか、女子供、押し引き、遅かれ早かれ、白黒、姿形、手間ひま、つぎはぎ、鶴亀、海山、売り買い、移り変わり、山川、やり取り、夜昼、読み書き、鎧兜など 。Labrune (2006) も類似の事柄を述べ、母音よりも唇子音や軟口蓋子音のような「強い」子音ではじまる要素が後部に来やすい理由は、第 1 要素と第 2 要素の境界の知覚性や弁別性を高めるためであると説明を加えている (pp.16–17, 31) 。声調。Mortensen (2003) はフモン語の co-ordinate compound の配列に声調が関与するという。

● 意味。Kiparsky (2009) では、現代ギリシャ語の co-compound の配列制約のひとつとして ICONICITY が挙げられている。構成要素が名詞であるばあいは、何が自然な順序であるかは、様々な具体的には異なる解釈がありうるが（重要性、大きさ、典型性 etc.）、構成要素が動詞である co-compound のばあいは、事象の時間的順序が類像的であると述べられている。そして、この制約は、英語やサンスクリットにも当てはまるものとしている。Malkiel (1959) や早田 (1977) 、Kageyama (1982) も意味的要因について述べている。早田 (1977) では、時間の順序や、プラスとマイナスではプラスが先、上下では上が先などとされている。ほかにも、社会的地位、単数複数、数列などの意味的な要因が知られている。Mortensen (2003) は、フモン語について、少なくとも親族名称に限れば意味的要因も働いているとする。

● 動作のしやすさ。アメリカの手話言語の co-compound は、サインがより簡単に繋がるように配列されるとされている (Klima and Bellugi1979) 。

以上いくつかの要因を見てきたが、どの要因が強く働くかは言語によって異なる可能性がある。Kiparsky (2009) はギリシャ語などでは ICONICITY の意味制約が SHORTEST FIRST の音韻制約に勝ると述べているが、ジンポー語では意味的要因はあまり働いていないようであり、音韻的要因の方が強く働いているものと考えられる。早田 (1977: 132) では上－下の順序は普遍的なようであると述べられているが、ジンポー語では下－上の順 (lǎwùʔ lǎhtàʔ 下部－上部、lǎgaw lǎtáʔ 足－手) も認められ、意味的要因よりも音韻的な要因の方が強く働いていることが伺える。また、配列が音韻的要因によるばあい、日本語では構成要素の最初の各音節が関与的であるとされるが、ジンポー語では構成要素が多音節語 (2 音節語) のばあい、各要素の最後の音節が関与的である。この点もバラエティがあるものと考えられる。

5　4 つのパートからなる対句表現

これまで 2 つのパートからなる例を見てきた。本節では 4 つのパートからなる例を見る。

5.1　いくつかの例

2 つの動詞からなる動詞連続が組み合わされると、4 つのパートからなる対句表現になる。

(152) shădu lùʔ shădu shá na htèʔ
料理する 飲む 料理する 食べる NOMZ COM
「料理して飲み料理して食べることで」(kr3:102)

(153) tsun shút shăga shút na mùng tsàng ai
言う 間違う 話す 間違う NOMZ も 心配する VSP
「言い間違え話し間違えることも心配した」(blog)

次のような装置を用いて、4 つのパートからなるイディオム的な対句表現が派生されることもある。以下の V には、基本的に同一の動詞が挿入される。例は (155) から (161) に示す。

(154) 4 つのパートからなるイディオム的な対句表現を派生する装置
- V lùʔ V shá (V–飲む–V–食べる)「V して暮らす、V することを生業とする[7]」
- V sa V wà ~ V wà V sa (V–行く–V–帰る〜V–帰る–V–行く)「V しながら行き来する」

(155) dai hpang hkái lùʔ hkái shá , rem lùʔ rem shá ai pràt
その後 植える 飲む 植える 食べる 飼う 飲む 飼う 食べる REL 時代
「その後に、農業をして暮らし、牧畜をして暮らす時代 (がまたやって来た)」(kt)

(156) dùt lùʔ dùt shá na rái hpa mùng ń-lû màt ai
売る 飲む 売る 食べる REL もの 何 も NEG-得る 完了 VSP
「売って暮らすものが何も得られなくなってしまった」(kr3:19)

(157) lăgùt myàʔ lùʔ myàʔ shá ai lam-ni grau láwʔ wà ai
泥棒 強盗する 飲む 強盗する 食べる REL こと-PL さらに 多い なる VSP
「泥棒が強盗して生活することがさらに多くなった」(kng)

(158) dùsàt dù.myéng-ni gàw tam lùʔ tam shá sa na lam mùng ń-ngâ
動物-PL TOP 探す 飲む 探す 食べる 行く REL 方法 も NEG-ある
「動物たちは生活していく方法もない[8]」(kr4:103)

(159) nàm è ngà ai ăshu ăshàn-ni hpéʔ hkám lùʔ hkám shá,
森 LOC いる REL 獲物-PL ACC 罠に掛ける 飲む 罠に掛ける 食べる
gàp lùʔ gàp shá chye gàʔai
撃つ 飲む 撃つ 食べる HBT VSP
「(人間は) 森にいる獲物を罠に掛けて暮らし、撃って暮らしている」(kr3:106)

---

[7] このような表現は、ポー・カレン語でも観察される (加藤昌彦先生 p.c.)。ほかのチベット・ビルマ諸語や、東南アジアの諸言語でもこのような表現が見つかるかもしれない。

[8] ジンポー語では、「探す＋食べる」の組み合わせで「暮らす、生活する」という意味を表すが、「探す」と「食べる」の組み合わせで「暮らす、生活する」という意味を表す表現は、タイ語や広東語にも見られるようである。東南アジア地域のほかの言語でも似たような表現が見られる可能性がある。

(160) hkyen-ni àʔ　mǎjàw,　hkawm　sa　hkawm　wà　grài　bá　ai
雪-PL　GEN　ために　歩く　行く 歩く　来る とても 疲れる　VSP
「雪のために、歩いて行き来するのがとても疲れた」(blog)

(161) *Myìtkyíná*, Laiza, Manmaw mawdaw lam yan lài　wà　lài　sa　mawdaw, *cycle*-ni
PLN　PLN　PLN　車　道　両　過ぎる 帰る 過ぎる 行く車　バイク-PL
「ミッチーナー、ライザ、バモー 間の道路を行き来する車やバイク」(kt)

生産的ではないが、次のような 4 つのパートからなるイディオム的な対句表現も観察される。この種の例は第一要素と第三要素が同一という、ABAC 型の形式を取る例が多い。

(162) si hkrung si htàn　（死ぬ－生きる－死ぬ－朦朧とする）「生死関頭」　(kr4:80)
(163) tsì hkrung tsì nan　（薬－生きる－薬－？）　「霊薬、妙薬」　(kr4:58)
(164) ngà sàt ngà sà　（いる－？－いる－行く）　「暮らし、生活」(kr4:120)

5.2　対句表現の拡張

2 つの対句要素からなる対句表現は、以下のような形態統語的方法によって、4 つのパートからなる対句表現へと拡張されることがある。

5.2.1　名詞の対句表現の拡張

名詞の対句表現の各要素に人称代名詞を付加すると 4 つのパートからなる対句表現になる。

(165) án　hpû　án　nau
2DU　兄　2DU　弟
「我々兄弟」(mlhk34)

5.2.2　動詞の対句表現の拡張

動詞の対句表現は、次のような、様々な形態統語的な要素を各対句要素の前や後に置くことで、4 つのパートからなる対句表現に拡張されうる。次の例の (166) は否定辞、(167) は動詞助詞、(168) は補助動詞[9]、(169) は副詞、(170) は主語名詞句が、2 つのパートからなる対句表現の各対句要素に付加されて、4 つのパートからなる対句表現に拡張されている。

(166) pălawng　pyi　ăstâwmshà　ń-bû　ń-hpún　lù　màʔai
服　さえ よく　NEG -穿く　NEG-着る　POT　VSP
「服さえもよく着ることができない」(kr3:17)

---

[9] 動詞助詞と補助動詞の形態統語的な違いについては倉部 (2011) を参照。

(167) shi gàw măsùʔ chye măgàwʔ chye ai
3SG TOP 騙す HBT 曲がる HBT VSP
「彼は性格が曲がっている」

(168) *saori san* ngai hpéʔ *hkauk soi*[10] htèʔ *juice* jàwʔ lùʔ jàwʔ shá ai
PSN さん 1SG ACC 麺 COM ジュース CAUS 飲む CAUS 食べる VSP
「沙織さんは私に麺とジュースをご馳走してくれた」(mail)

(169) grau hkum grau tsúp ai
より 完全だ より 完全だ VSP
「より完全である」(mlhk0)

(170) ntâ htèn ntâ zà ai
家 壊れる 家 被害を受ける VSP
「家が壊れた」

6 対句表現の意味

だいたい同一の意味を表す 2 つの要素からなる対句表現は、その構成要素と同じ意味を表すが、単独で使われるばあいよりもより文語的であるようである。また、異なる意味を表す 2 つの要素からなる対句表現の表す意味は、2 つの要素の意味を足し合わせたものもあるが、総称的な意味を表すこともある。たとえば、lăbù pălawng (ズボン－服) という対句表現は「ズボンと服」という足し算的な意味ではなく、「衣類」という意味を表す。これは、構成要素を類とする種であり、上位概念に相当する。仮に lăbù pălawng (ズボン－服) が「ズボンと服」という意味を表しているのであれば、次の例は意味的に逸脱性のある文であると判定されるはずであるが、次の例はそのようには判定されない。

(171) mawza gàw lăbù pălawng rê
靴下 TOP ズボン 服 COP
「靴下は衣類である」

このように、対句表現の表す意味は構成要素の総和であるとは限らない。対句表現全体の意味がどのような意味であるかを見極めるのは難しく、名詞以外の対句表現になるとこのことはいっそう難しくなるのであるが、対句表現がどのような意味を表すかについてさらに詳しく調べる必要がある。今後の課題である。

7 まとめ

本稿では、ジンポー語における対句表現の記述を行なった。また、対句要素の配列法則として以下の 3 つの法則を取り出した。さらに、4 つのパートからなる対句表現や、対句表現の意味についても取り扱った。

---

[10] ビルマ語。

(172) 本稿で取り出した対句要素の配列法則

- 法則 1： 対句要素間で音節数が同一であるばあい、相対的に狭い母音を含む対句要素は相対的に広い母音を含む対句要素よりも先に来る
- 法則 2： 対句要素間で音節数が異なるばあい、1 音節語は多音節語 (2 音節語) よりも先に来る
- 法則 3： 対句要素が固有語と借用語からなるばあい、固有語は借用語よりも先に来る

追記・謝辞

本稿は、チベット・ビルマ言語学研究会において 2010 年 7 月 24 日に、また、総合地球環境学研究所言語記述研究会において 2010 年 7 月 21 日および 2010 年 12 月 15 日に発表した内容に基づいている。貴重なご助言をいただいた、長田俊樹先生、加藤昌彦先生、高橋慶治先生、千田俊太郎先生、仲尾周一郎氏、藤原敬介氏、藪司郎先生の各氏に心から厚くお礼申し上げたい。なお、本稿における誤りは当然ながら筆者に帰するものである。

略号一覧

ACC	対格	GEN	属格	PSN	人名
BEN	受益	HBT	習慣	Q	疑問
CAUS	使役	NEG	否定	REL	関係節標識
COM	共格	NOMZ	名詞節化標識	SFP	終助詞
CONT	継続	PASS	受動	SG	単数
COP	コピュラ	PL	複数	T	声調
DU	双数	PLN	地名	TOP	主題
EXP	経験	POT	可能	VSP	動詞文助詞

資料

物語集: (kr1), (kr2), (kr3), (kr4), (ml), (mlhk), (gtl) 、ニュース: (kng), (kno), (kt), (radio) 、指導書: (jhhjhk) (hth) 、雑誌: (jp), (krj3), (ss) 、メール: (mail) 、ブログ: (blog) 、 歌: (uta)

参考文献

Benedict, P. K. (1972) *Sino-Tibetan: a conspectus.* Combridge: Cambridge University Press.

Ebata, Fuyuki. (2003) Paired words in Yakut (Sakha). *Turkic Languages.* 7: 257–267.

Hanson, O. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

Kageyama, Taro. (1982) Word formation in Japanese. *Lingua.* 57: 215–258.

Kiparsky, P. (2009) Verbal co-compounds and subcompounds in Greek. *MIT Working Papers in Linguistics*. 57.

Klima, E. S., U. Bellugi et al. (1979) *The Signs of Language.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Labrune, L. (2006) Patterns of Phonemic Preferences in Japanese non-headed Binary Compounds: What *waa-puro*, *are-kore* and *mecha-kucha* Have in Common. *Gengo Kenkyuu.* 129: 3–41.

Matisoff, J. A. (1973) *The Grammar of Lahu.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Malkiel, Y. (1959) Studies in Irreversible Binomials. *Lingua*. VⅢ.2: 113–160.

Mortensen, D. (2003) Hmong Elaborate Expressions are Coordinate Compounds. Unpublished, UC Berkeley.

Peterson. D. (2010) Khumi elaborate expressions. *Himalayan linguistics*. 9.1 : 81–100.

Riddle, E. (1990) Parataxis in Hmong. *When Verbs Collide*. the Ohio State University Working Papers in Linguistics. 39.

Sakamoto, Ayako. (2010) Attendant word complex in Khmer. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area.* 33.1: 41–70.

Solnit, D. (1997) *Eastern Kayah Li, Grammar, Texts, Glossary.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Tida, Syuntarô. (2006) Polysemy and multi-word lexical items in Dom. *Papuanists' Workshop 2006*, The University of Sydney, Sydney, Australia.

Wälchli, B. (2005) *Co-compounds and natural coordination*. Oxford: Oxford University Press.

Ｅ・Ｒ・リーチ (1987)『高地ビルマの政治体系』（関本照夫訳）弘文堂.

長田俊樹 (2009)「ムンダ語の感情語」大西正幸・稲垣和也（編）『地球研言語記述論集』1: 35–66．京都：総合地球環境学研究所インダスプロジェクト.

加藤昌彦 (2005)「ポー・カレン語の対句法 (parallelism)」中山俊秀・塩原朝子（編）『記述研究から明らかになる文法の諸問題』145–159．東京：アジア・アフリカ言語文化研究所.

倉部慶太 (2010)「ジンポー (カチン) 語における動詞連続の文法化」大西正幸・稲垣和也（編）『地球研言語記述論集』 2：15–37．京都：総合地球環境学研究所インダスプロジェクト.

倉部慶太 (2011)「ジンポー語文法の概要」京都大学大学院文学研究科修士論文.

西田龍雄 (1960)「カチン語の研究－バモ方言の記述ならびに比較言語学的考察」『言語研究』38：1–32.

早田輝洋 (1977)「対語の音韻階層－なぜ「こっちあっち」と言わないか」『文学研究』74：123–152．九州大学文学部.

戴慶厦 (1986)「景頗語並列結構複合詞的元音和諧」『民族語文』5．中国社会科学出版社.

戴慶厦 (2000)「哈尼語的並列複合名詞」『中国哈尼学』1．雲南民族出版社.

戴慶厦・徐悉艱・肖家成・岳相昆（編）(1983)『景漢辞典』昆明：雲南民族出版社.